

『ワートル先生の学校』：トロロープの晩年のチャレンジ

● 香 山 はるの

アンソニー・トロロープ(1815-82)の晩年の小説、『ワートル先生の学校』(*Dr. Wortle's School*, 1881)は、ジョン・ハルペリン(John Halperin)が示唆するようにトロロープの最も「過激な」小説といえる(viii)。トロロープは多くの作品で、同時代の行動規範や道徳律を支持したが、この小説は「魅力的な例外」であるというのだ(viii)。『ワートル先生の学校』においてトロロープは「重婚」という問題を大きく取り上げ、社会全般に受け入れられている「常識」や価値観に疑問を投じた。事実、1880年5月からこの小説を連載した『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Magazine*)の編集者、ウィリアム・ブラックウッド(William Blackwood)は当初内容が「危険」であるとなかなか懸念を示したという(Terry, 158)。本稿ではこうした点に着目し、「重婚」というテーマに挑んだ晩年のトロロープの考えを探る。また、いわゆる「センセーション・ノベル」との違いという観点から、トロロープの小説家としての姿勢についてあらためて考察したい。

トロロープの小説において、重婚はしばしば外国と結びつけられる。たとえば『ジョン・カルディゲイト』(*John Caldigate*, 1879)では、主人公のジョン・カルディゲイト(John Caldigate)が、ヘスター・ボルトン(Helster Bolton)と結婚する以前に、ニューサウスウェールズの採金地で結婚をしていたのではないかと嫌疑をかけられる。また、『ユースタス家のダイヤモンド』(*The Eustace Diamonds*, 1872)ではリジー・ユースタス(Lizzie Eustace)の夫、ジョーゼフ・エミリウス(Joseph Emilius)が、かつてプラハで別の女性と結婚していた事実が判明する。このように、外国はしばしば墮落や道徳的腐敗と関連づけられている。『ワートル先生の学校』の場合も、ピーコック「夫妻」はアメリカ、セントルイスからやって来る。ただし、上記のジョンやジョーゼフのケースと比べて、ヘンリー・ピーコック(Henry Peacocke)とエラ(Ella)はかなり同情的に描かれている。第一にエラの最初の夫のファーディナンド・レフロイ(Ferdinand Lefroy)は、大酒飲みのならず者で、妻を虐待していたという事情があった。このとき、エラに同情し、色々な援助をしたのがセントルイスで教師をしていたイギリス人、ヘンリーであった。二人は互いに惹かれ合っていく。トロロープは、この小説を執筆する前に4回アメリカを訪問しているが、旅行記『北アメリカ』(*North America*)に記しているように、特にアメリカ西部については、「粗野」や「荒廃」というネガティブな印象が強く、嫌悪していたようである(*North America II*, 145-49)。この意味で、ヘンリー・ピーコックは、いわば西部の荒くれ男との奴隷のような結婚生活からアメリカ女性を救ったイギリス人紳士なのである¹。また、ヘンリーもエラも自分たちの結婚が「重婚」にあたるということを知らなかったという点も重要である。ファーディナンドはエラを置いて家を出て行った後、死亡したと言われていたからである。そして、ファーディナンドがある日突然彼らの前に現われ、再び姿を消してからも、ヘンリーはエラを見捨てることはできなかった。こうして二人はヘンリーの故郷、イギリスに行き、ジェフリー・ワートル先生(Dr. Jeffrey Wortle)の経営するボーウィック・スクール(Bowick School)で「ピーコック夫妻」として働くことになる。ヘンリーは教師、エラは生徒達の世話を含め学校の雑務を担当

した。

この小説において、まず注目すべきは、トロロープがヘンリーとエラの「結婚」の秘密を小説の前半、3章で読者に明かしていることである。「もし、読者の皆さんが小説を読む楽しみに、今後も何か秘密が必要ということでしたら、この本を読むのはここでやめて下さい。次の段落で一次に書く6語で一謎が明かされるのですから。ピーコック夫妻は実は、正式な夫と妻ではなかったのです」(*Dr. Wortle's School*, 28)²。トロロープは『オーリー農場』(*Orley Farm*, 1862)においても、小説の前半からレディー・メイソン(Lady Mason)が犯した罪を読者に示唆しているが、そこには謎の保持によって読者の興味を引くことを拒む彼の小説家としての姿勢が表れている。「作者と読者は全面的に信頼しあって共に進まなければならないというのが、我々の原則だ」(*Barchester Towers*, 112)。

また、『ワートル先生の学校』における「種明かし」には、同じく「重婚」をテーマにした小説を書いた同年代の作家、ウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins, 1824-89)に対する意識も感じられる。『自伝』(*An Autobiography*, 1883)の中でトロロープは、現在のイギリスの小説家は、「扇情的」(“sensational”)、或いは「非扇情的」(“anti-sensational”)のいずれかに大別され、自身は後者、別の言葉で言えば「リアリスティック」(“realistic”)と呼ばれるタイプに属すると述べている(142)。すなわち、トロロープはサスペンスの持続やプロットの展開よりも、人間として共感できる人物(キャラクター)の創造に重きを置くというのである。確かに、『ワートル先生の学校』に関して言えば、作品の主眼は、ピーコック夫妻の謎に満ちた関係を徐々に明らかにしていくことではなく、その事実を知ったとき人がどのように反応し、行動するかという点にある。そして、その中心になるのは実はピーコック夫妻ではなく、作品のタイトルが示すように、ワートル先生であることは注目に値する³。独立心が強く、人から意見を押しつけられることを嫌うジェフリー・ワートルは、ピーコック夫妻の問題を熟考した上で、二人が取った行動をやむを得ないものとして全面的に支持する。ピーコック夫妻に起こったことは特殊なケースであり、通常の見方で善悪を判断することはできないというのが、ワートル先生が思い悩んだ未到達した信念である。7章で彼は妻に次のように言う。

「誰でもこうしたことにはめったに出くわさない。あまりに変わったことなので、世間一般の人生のルールは指標にならない。我々大抵の者には起こらないことだし、起こらない方がいい。しかし、起こってしまったら一般的なルールの枠を超えて対処せざるを得ない。そういう気持ちで私はピーコック夫妻を守ることにしたのだ。」(213)

一方、ワートル先生は何もせず、問題を曖昧しておこうとしたわけではない。彼は、ヘンリーがファーディナンドの生死を確かめるためにアメリカへ渡ることに賛同し、その間エラを引き続き自分の家に滞在させると申し出た。ワートル先生は、宿敵、スタンティロウ夫人(Mrs. Stantiloupe)からどんなに批判、中傷を受けても意に介さない。また、彼は学校の校長であると同時にボーウィック村の主任牧師でもあるのだが、「道徳的に疑わしい人物」を働かせていることを主教から咎められると、憤って主教に戦いを挑む。実際、ピーコック夫妻に関するスキャンダルが原因で、多くの生徒が学校をやめていく状況にも拘わらず、先生は自分の信念を貫いて、ピーコック夫妻を支え続けるのである。

以上示唆したように、この小説の大きな魅力がワートル先生、ジェフリー・ワートルのキャラクターにあることは明らかである。トロロープはしばしば頑固で好戦的なキャラクターを創造し

た。たとえば、「バーセットシャー年代記」(“The Chronicles of Barsetshire”)の『ソーン先生』(*Doctor Thorne*, 1858)のトマス・ソーン(Thomas Thorne)や『バーセット最後の年代記』(*The Last Chronicle of Barset*, 1867)のジョサイア・クロリー(Josiah Crawley)である。彼らが、高慢なレディー・アラベラ(Lady Arabella)やプラウディ夫人(Mrs. Proudie)など、社会的に上位の者に楯突く場面は読者の笑いや共感を誘う。この二人と同様、ワートル先生も頑固でプライドが高く、他人に干渉されるのが嫌いである。「実際、彼は自分に忠告する人には皆、他人の事に口をはさまないことですねと言ってやった」(2)。トロローブは概して、ソーン先生やクロリー、ワートル先生のような独立心が強いキャラクターを好意的に描いた。特にワートル先生の場合、自身の評判を危うくしてまでもピーコック夫妻を擁護し、主教と徹底抗戦しようとする彼の姿勢に多くの読者は共感を抱くのではないか。「先生は自身の気性をよくわかっていたので、戦うとなったら自分はどんどん熱くなって……完全な勝利か完全な敗北以外の結末はないだろうと思っていた」(166)。また、信念に従って権威に抗うことも辞さないワートル先生に対し、彼を批判する主教が世間体にこだわる浅薄な人間として描かれていることも重要である(Halperin, xviii)。

多くの批評家が、ワートル先生のキャラクターにトロローブの「自画像」を見ているのは興味深い。たとえば、R・C・テリーは、頑固で寛容、高慢で怒りっぽいが自分の主義に忠実なワートル先生は、トロローブに酷似していると指摘している(159)。また、トロローブの伝記で知られるヴィクトリア・グレンディニング(Victoria Glendinning)も、トロローブの長男、ヘンリー(Henry Merivale Trollope, 1846-1926)が、1923年に批評家のマイケル・サドリア(Michael Sadleir)に、ワートル先生は父親に似ていると語ったエピソードを紹介している(301)。

さらに、ワートル先生とエラ・ピーコックの関係においても、作者の伝記的要素を見ることができかもしれない。たとえば、ミック・イムラ(Mick Imlah)はワートル先生のエラに対する好意に、トロローブがケイト・フィールド(Kate Field, 1838-96)という若いアメリカ人女性に抱いていた感情が投影されていると示唆している(xi)。ケイト・フィールドはボストンの女優、ジャーナリストで、フェミニストでもある。キャロリン・J・モス(Carolyn J. Moss)のエッセイ、「アンソニー・トロローブとケイト・フィールド—ある友情の物語」に詳しいが、1860年、ケイトがフィレンツェで歌を学んでいた時、トロローブは兄トムの家で彼女と知り合った。トロローブは45歳、ケイトは22歳であった。トロローブは知的でチャーミングなケイトに惹かれ、以後生涯にわたり彼女と友情を育んだ(33-53)。死後に出版された『自伝』の後半でトロローブは書いている。「一人のアメリカ人女性がいる。私の回顧録となるこの本の中で彼女について話さなかったら、私の晩年に光彩を添えた主な喜びの一つに全く触れないことになってしまう」(*Autobiography*, 195)。一言で言えば、トロローブはケイトに対して、半ば父親のような愛情を感じていたようである。たとえば、1860年代から80年代にかけてトロローブがケイトに宛てた手紙が20通ほど残っているが、その中で彼は南北戦争の最中にボストンに帰らない方が安全だとケイトの身を案じたり、彼女の詩を酷評し、詩よりも散文を書くように勧めたり、時には彼女のフェミニストとしての主張をからかって、結婚するようアドバイスをしている(*The Letters of Anthony Trollope I*, 158, 171, 509)。『ワートル先生の学校』では、ワートル先生は50代半ば、エラは30歳前半という設定になっている。ワートル先生は美しいエラに「心酔」しているとロンドンの新聞に面白おかしく書かれて傷つくが、この若いアメリカ人女性を庇護したいという彼の気持ちには、トロローブのケイト・フィールドに対する感情と幾分類似しているところがあるかもしれない。「彼女は安全です。ここに、私のところにいれば、人から侮辱を受けることもないでしょ

う」(107)。

実際、ピーコック夫妻の件でワートル先生が最も憤りを感じたのは、世間のダブル・スタンダード、すなわち男性に対しては寛容で、女性に対しては冷酷な評価を下す社会の価値観である。「不幸な目にあった女性は世間に非難され、一方、過ちを犯した男性はせいぜい男性ならそういうことはあるだろうと思われるくらいだ」(43)。トロロープはこうしたヴィクトリア朝の偽善的な考えを幾つかの作品で取り上げた。たとえば、『当世の生き方』(*The Way We Live Now*, 1875)のポール・モンタギュー(Paul Montague)はアメリカでウィニフレッド・ハートル(Winifred Hurtle)と関係を持ち、結婚の約束をするが、イギリスに戻るとヘッタ・カーベリー(Hetta Carbury)に心を移した。彼の場合、アメリカでの過去はいわば「若き日の過ち」として許されるのであるが、一方、恋人を追ってイギリスまでやってきたウィニフレッドは、男を誘惑する危険な女性としてロジャー・カーベリー(Roger Carbury)のような保守的な人間に憎まれ、蔑まれる。トロロープは、ウィニフレッドのポールに対する愛を純粹なものとして捉え、彼のために身を引く彼女の姿を同情を込めて描いている。

『ワートル先生の学校』においても、トロロープは男女の関係をめぐるダブル・スタンダードが人々の間にいかに根強く浸透しているかを示唆している。たとえば、11章の初めには、ピーコック夫妻のスキャンダルに対するポーウィックの人々の一般的な反応が書かれている。「教区の人々の目から見れば、もちろん女の方が罪が重かった。その罪深い女が学校にとどまるのを許されるとは！」(112)。また、ワートル先生の妻は「教区で最も優しく、隣人に対して最も寛容な女性」(97)だというが、彼女ですらヘンリーより、重婚と知った後も彼と別れないエラに対してむしろ批判的であった。これについてトロロープは妻という安定した立場を確保した女性の反応だと皮肉っている(95)。けれども、エラと何度か会い、話をしていく中でワートル夫人は考えをあらためる。エラの人生はまさに波瀾万丈であった。ルイジアナでプランテーションを営んでいた彼女の実家は、南北戦争によって零落した。親の勧めでファーディナンドと結婚したが、夫から酷い扱いを受け、「生まれてきたことが不幸だった」(206)と感じるような惨めな日々を送った。その後、ファーディナンドの死を信じてヘンリーと再婚するのだが、ある日ファーディナンドが現われたことで状況は一変する。二人は意図せず重婚の罪を犯したことが判明したのである。エラはヘンリーのことを思って彼と別れる決心をするが、彼は同意しなかった。結局、エラは真に愛する「夫」、ヘンリーに従うことが自分の義務だと考え、彼と一緒に暮らし続ける道を選んだ。エラはワートル夫人に訴える。「奥様だって、こうした状況では同じことをしないでしょか？……間違っていたのでしょうか。時には何が正しくて何が間違っているのか言うのは難しいです」(207)。ハルペリンが言うようにこのエラの言葉こそ、小説の核心を衝いている(xx)。トロロープは、事情を考慮することなくエラを「罪人」、或いは「墜ちた女」と非難する世間一般の見方に疑問を突きつけたのである。

ヘンリーとエラの関係は、文芸批評家のジョージ・ヘンリー・ルイス(George Henry Lewes, 1817-78)とジョージ・エリオット(George Eliot, 1819-80)の関係を思い起こさせる。ルイスとエリオットの場合、重婚ではないが、ルイスが妻と離婚できなかったため事実婚を選択せざるを得なかった。ティム・ドリン(Tim Dolin)の『ジョージ・エリオット』(*George Eliot*)に記されているように、1850年代半ばに妻子あるルイスと暮らし始めたエリオットは、世間から厳しい批判を浴びた。家族とも疎遠になり、たとえ親しい知人であっても、既婚女性の多くは彼女を訪ねて来なくなったという(25-31, 33)。トロロープに関して言えば、彼はルイスとエリオットの因習にとらわれない関係を受け入れて親しく付き合ったようである⁴。1860年、『コーンヒル・

マガジン』(*The Cornhill Magazine*)の出版者、ジョージ・スミス(George Smith)が開いた晩餐会で、トロロープはルイスと出会い、それ以来親交を深めてきた。たとえば、ルイスの息子、チャールズ(Charles)はトロロープの口利きで中央郵便局に就職したという(Glending, 299)。そして、トロロープはルイスを通じてエリオットとも知り合い、懇意になった。彼は『自伝』の中で、エリオットのことを「イギリス小説の第一人者」と高く評価し、「この才能ある女性は私の最も大切な、最も親しい友人の一人」だと公言している(153-54)。実際、トロロープのエリオットに宛てた手紙には、彼がしばしばルイスとエリオットの家を訪問したことが示唆されている(*Letters I*, 158, 227, 346-47)⁵。1878年にルイスは亡くなり、翌年1月、トロロープは『フォートナイトリー・レビュー』(*The Fortnightly Review*)に数ページにわたる追悼文を寄稿した。R・C・テリーが論じているように、4月に『ワートル先生の学校』を執筆した時も、トロロープはおそらくルイスとエリオットの複雑な関係や彼らが経験した苦難について考えていたのではない(158)。

このように、トロロープは慣習に従わない変則的な「結婚」に対して、寛容な態度を取っていた。しかし、彼は結婚の制度そのものを懐疑的に見ていたわけではない。この点はたとえば、同じく「重婚」を扱ったコリンズらのセンセーショナルな小説と基本的に異なる。ジーン・ファーンストック(Jeanne Fahnestock)は1860年代から70年代にかけて流行した「重婚小説」(“bigamy novels”)について分析し⁶、こうした流行の背景には当時の人々の結婚制度に対する幻滅や逃避願望があったと示唆している(65)。たとえば、コリンズの『夫と妻』(*Man and Wife*, 1870)という作品について考えてみよう。この小説では、ヒロイン、アン・シルヴェスター(Anne Silvester)の悲惨な結婚生活が描かれるが、「序」で自ら述べているように、コリンズの目的はスコットランドやアイルランドの婚姻法の不備を批判し、改正を訴えることだった。最終的に、自身も夫から虐待を受けたというヘスター・デスリッジ(Hester Dethridge)が、アンの夫、ジェフリー・デラメイン(Geoffrey Delamayn)を殺害して彼女を救う場面は衝撃的である。

一方、『ワートル先生の学校』において、トロロープは、ヘンリー・ピーコックをアメリカに送り、ファーディナンドの死亡を確認させた上で、あらためてエラと教会で正式な結婚を行わせている。式を執り行うのはワートル先生と近隣の教区司祭、プディコム(Puddicombe)である。こうして、ヘンリーとエラの結婚が法の枠の中に収まったとき、ボーウィックの人々も彼らを受け入れるようになっていく。たとえば、ワートル先生の学校から一時離れた生徒たちも次々と戻ってきた。この意味では、ピーコック夫妻を擁護するワートル先生の信念が、人々の偏見に打ち勝ったと言えるであろう。ある意味で、トロロープはコリンズが描いたような衝撃的な結末を選ぶほど、結婚という制度に対して失望していなかったと言えるかもしれない。サブ・プロットにおけるワートル先生の娘、メアリー(Mary)とカーステアズ卿(Lord Carstairs)の結婚もこのことを示唆している。メアリーとカーステアズ卿の恋愛は大きな障害もなく、二人は双方の家の賛同を得て婚約に至った。小説の終わりには、メアリーがクリスマスに婚約者の家で幸せに過ごす様子が描かれている。ワートル先生を中心とするメイン・プロットと比べると、このサブ・プロットは「形式的」(Halperin, xix)で精彩を欠いていることは否めないが、「小説に恋愛は必要だ」(*Autobiography*, 140)と考えるトロロープは、メアリーとカーステアズ卿の話を加えることによって全体のバランスを保とうとしたのではないか。

最終的にトロロープが、ピーコック夫妻といういわゆる「異端分子」をワートル先生の学校、より広い意味ではボーウィックのコミュニティーに、留まらせた点は意義深い。たとえば、先に述べた『当世の生き方』の「墜ちた女」ウィニフレッド・ハートルはイギリスに居場所を見つけ

られずに、アメリカに戻っていく。また、『レディー・アナ』(Lady Anna, 1874) や『ニナ・バラトカ』(Nina Balatka, 1867) などの作品においても、身分や宗教の異なるカップルは、故郷を後にして新天地での再出発を図る。一方、この小説では、ピーコック夫妻に対するワートル先生を中心とする人々の理解や気持ちの変化に重点が置かれている。そして、それを通して、トロローブは読者の意識の変化をも促しているのである。本稿の初めに言及したブラックウッド氏の危惧にも拘わらず、当時の *Saturday Review* や *Athenaeum* などの書評から判断する限り、『ワートル先生の学校』は全般に好意的な評価を受けたようである (Smalley, 475, 479-480)。これは主としてワートル先生が説得力のある、魅力的なキャラクターになっていること、また、ピーコック夫妻の結婚に対してワートル先生、及びトロローブが取った姿勢が概ね受け入れられたことを示唆するものであろう。トロローブは「重婚」というテーマを扱いながら、コリンズの小説のようなセンセーション・ノヴェルとは大きく異なる世界を創造した。ここに晩年のトロローブのチャレンジ、及び「リアリスティック」な小説家としての彼の強い自負が示されているのである。

注

1. デボラ・ディーネンホルツ・モース (Deborah Denenholz Morse) は、エラ・ピーコックの肌の黒さに注目し、この小説を、イギリス人男性がアメリカの美しい奴隷女性を救う物語として捉えている。“Bigamy and the Creole Beauty: Race Anxiety in *Dr. Wortle’s School* (1881),” *Reforming Trollope*, pp. 133-165.
2. 『ワートル先生の学校』からの引用は全て Anthony Trollope, *Dr. Wortle’s School*. Oxford: Oxford UP, 1990. にもとづいた拙訳であり、以下括弧内に原書の日数を記した。
3. ロバート・トレイシー (Robert Tracy) によれば、トロローブは当初『ピーコック夫妻』(*Mr. and Mrs. Peacocke*)、或いは『ボーウィック・スクール』(*Bowick School*) というタイトルを考えていた。後に『ワートル先生の学校』というタイトルに変更されたことは、作品の焦点がピーコック夫妻からワートル先生に移ったことを示唆している。p. 261.
4. トロローブは手紙の中で、エリオットのことを「ルイス夫人」(“Mrs. Lewes”) と呼んでいる。
5. ただし、グレンディニングによれば、トロローブは妻ローズを同伴して彼らの家に行くことはなかった。また、エリオットもウォルサム・クロスにあるトロローブ夫妻の家に来ることはなかったという。p. 302.
6. ファーンストックによれば、「重婚小説」の流行のピークは1862-65年であるという。p. 55.

引用文献

- Dolin, Tim. *George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2005.
- Fahnestock, Jeanne. “Bigamy: The Rise and Fall of a Convention.” *Nineteenth-Century Fiction*. 36. 1 (1981): 47-71.
- Glendinning, Victoria. *Trollope*. London: Pimlico, 1992.
- Halperin, John. Introduction. *Dr. Wortle’s School*. By Anthony Trollope. Oxford: Oxford UP, 1990.
- Imlah, Mick. Introduction. *Dr. Wortle’s School*. By Anthony Trollope. London: Penguin, 1999.
- Morse, Deborah Denenholz. “Bigamy and the Creole Beauty: Race Anxiety in *Dr. Wortle’s School* (1881).” *Reforming Trollope: Race, Gender, and Englishness in the Novels of Anthony Trollope*. Farnham: Ashgate, 2013.
- Moss, Carolyn J. “Anthony Trollope and Kate Field: The Story of a Friendship.” *Dickens, Trollope, Jefferson: Three Anglo-American Encounters*. Ed. Sidney P. Moss and Carolyn J. Moss. Albany, NY: Whitston Publishing Company, 2000. 31-53.

- Smalley, Donald, ed. *Trollope : The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Terry, R. C., ed. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. Oxford : OUP, 1999.
- Tracy, Robert. *Trollope's Later Novels*. Berkeley : U of California P, 1978.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography and Other Writings*. Oxford : Oxford UP, 2016.
- . *Barchester Towers*. Oxford : Oxford UP, 2014.
- . *Dr. Wortle's School*. Oxford : Oxford UP, 1990.
- . *The Letters of Anthony Trollope*. Vol. I. 1835–1870. Ed. N. John Hall. Stanford, California : Stanford UP, 1983.
- . *North America*. Vol. II. Cambridge : Cambridge UP, 2012.